

西田慶二先生の思い出

「思い出すまま」(一)

二十七回生 坂田 知子

千里山会の萩原さんから再三、千二小の恩師 西田慶二先生の思い出について書くようにと命じられましたので、少し思い出すまま書かせていただきます。

私は姉二人兄一人の四人姉兄の末っ子で、全員千里山生まれ、そして千二小でお世話になりました。偶然ですが萩原さん御姉弟四人共私たち姉兄と同学年です。そして家も近かったので、親同士もよく知っていました。

さて、私は五年生から卒業までの二年間西田先生に受け持って頂きました。それまでの担任の先生と比べると声と体が大きくて、ちよつと恐そうだなというのが第一印象でした。当時の先生のクラス経営は「大らか」だけど「大雑把(すみません)」な感じでした。両

隣のクラスは担任の先生が勉強その他の面で木目細かな指導をされているように見えて、まだ子供の私は内心羨ましく思ったものでした。でも今思い返してみると、西田先生のやり方はいろいろな事が分かりかけてきた生意気盛りの子供達に一つ一つ指図するのではなく、丁度広い牧場内に放り込まれた子羊達(我々)が柵からはみ出しそうになった時だけ注意を与えるという風でした。お陰でクラスのみんなはのびのびとあの自然環境に恵まれた学び舎で、放課後もよく遊んでいました。特に冬場、ワイワイ言いながらドッジボールや縄飛びに夢中になったのも楽しい思い出です。勿論学習塾などが無かった時代です。

二年年間にあった様々な出来事は殆んど忘却の彼方ですが、今でも先生の温顔が懐かしく目に浮ぶ光景があります。私が先生に何か口答えした時、「坂田の言う通り」と言われた後、「お母さんはおとなしくていい人なのに・・・」と呟いて苦笑された時の顔。今思い出しても申し訳なく思います。又私が大学卒業後三ヶ月間講師として千二小で勤めた時も、やさしく迎えてくださいました。

西田先生の思い出(二)

二十七回生 住田 登喜子

(旧姓 山崎)

平成十五年には私は永年住み慣れた千里山を離れましたが、今も偶に夢の中に千二の旧校舍、千里山の坂道、我が家などが現れます。そんな時には決して叶わぬ事なのに、もう一堂に会することが出来たらなあ、それこそ夢のような事を考えている昨今です。

「千里山は子供を育てるのに最適の環境だと思つた。」と、かつて両親は述懐していました。世の中も戦後だんだんと落ち着きつつあった頃に、長閑な千里山で大きな心配事もなく子供時代を過ごせたのは本当に幸せだったと感謝しています。

四月半ばを過ぎているというのに、うすら寒い日が続いておりました。ある日、夕食を終え阪神対広島戦の野球中継を夢中になって見ていました時、思いがけなく千二小学校同窓生の萩原君よりお電話がありびっくりしました。西田先生との思い出に関する原稿の依頼でした。萩原君のご苦勞を思い「・・・書いてみます」と安請け合いましたもの、一さて困った。正直、小学校の思い出はほとんど出てこないのです。それというのも私は千二小卒業後、吹田一中で一年生二年生のみを過ごした後、東京の中学に転向し、それ以来思春期をずっと東京で過ごしたからではないでしょうか。

西田先生には小学五、六年雪組を受け持って頂きました。先生といえは黒縁のメガネ、立派な体格、大きなダミ声、そして子供心にこわい先生という印象でした。でも私自身直接厳しく叱られたことはないように

思います。

私は小学六年にして強い近視でした。でもメガネがいやでかけていませんでした。時々西田先生の声がとんできました。

「やーまーざーきーもつと目から離せ！」

例えばティッシュ(当時はハナ紙といっていたかな?)を一枚取り出す時、紙の束を目にくっつきそうになるくらい近づけていたり、字を書くときにノートに覆い被さるようにしていたのでしよう。

また、ある日クラスの男子女子生徒数人と先生のお宅に遊びに行かせて頂いたことがありました。確か、花や木が植った広いお庭やお家の周りを先生の案内で散策したり、すきやきをご馳走になったことを覚えています。楽しい思い出の一つです。今の時代では考えられないような良き時代でした。

さて、今から四年程前、当時のクラスメートの西田悠紀夫君が幹事をしてくださり、西田慶二先生を囲む(当時の六年雪組)同窓会を開いてくださいました。千里山の伯母(故)が後藤歯科医院を閉院し、箕面に居を移してからは久しく千里山に足を運ぶことがなかった私にとっては、とても懐かしい千里山の「魚伊」

さんでの集まりでした。何しろ五十数年ぶりの再会とあって、クラスメートの間でも全くわからない方々もいらっしやる中で、西田先生は昔の面影そのままでした。足がお悪いとかで歩くのにはご不自由そうでしたがお元氣そうで、(当時我々が子供だったので余計に大きく感じていた)お身体を揺すって笑っておられるお姿はあの頃を髣髴とさせる様でした。本当にお会いできてよかったです。

先生と小学生、あんなに大人と子供(笑)だったのに、今は年を言わなければ差がないように見える位我々も成長(?)しました。

お互いにいつまでもお元氣で過ごしたいものです。

(編集部)

住田(旧姓 山崎)登喜子様は二十五回生・牧村佳那子様は妹さんです。伯母様が医師をされていた後藤歯科は確か片山様の家の斜め向かいぐらいいったと思います。

平成十六年十月三日 二十七回生六年雪組同窓会

西田先生の後ろは駒井君

右端の女性は住田(旧姓山崎)さん



西田先生の思い出(三)

二十七回生 森 勝美

四月もようやく過ぎようとするころ突然の小学校同級生の電話。

「どや、元氣か。あんな、頼みあんなねん。西田先生の思い出ちよつと書いてくれへんか。」

晩酌のほろ酔い勢いもあって、「ああ。」と安請け合いましたものの、さて・・・。

西田慶二先生、小学校5年6年の2年間をクラス担任していただいた。55年前のことである。さして目立たなかった(と思っている)自分としては際立った思い出があるわけでもないことに改めて気がついた。でも西田先生の姿は明瞭に思い出せる。

がっしりしたお顔、太縁のめがねの奥で目が優しく優しい。お声はハスキーだったように思う。大きなお体に体操服が大変よくお似合いで、ちよつと猫背ぎみだったかな。

運動会などで先生の活躍されるお姿が際立って

いたことが思い出される。

授業での思い出は、名前を呼ばれて教壇に進み、出された問題が解けないで黒板に向かって立ちすくんでいると、多分地図の指し棒が何かで頭をコン、イテ、涙がチロ。

でも今となっては自分にとって最も心なごむ西田先生との思い出となっている。

先生はおいくつになられたのだろうか。いつまでもご健勝でおられることを念じている。

西田慶二先生(四)

二十四回生 小野 和子

(旧姓 萩原)

私は小学校の六年間のうち、何と、四・五・六年生の三年間を、西田慶二先生に受け持ってもらったのです。あまりに思い出が多くて、何から書いていいのやら迷ってしまいます。

私たちの学年は、四年生まではクラス変えなしで同じ仲間で四年間を学び、五年生になって初めてのクラス変えがあり、今までの友達とはバラバラになってしまいました。

でも、長谷川宏明君、北村勝則君、三島(本間)睦子さん、服部慶子さんなど、数名は同じクラスになることができ、四年生と同じ、「西田慶二」先生の受け持ちで卒業することができました。

四年生になったとき、今までは、優しい女の先生ばかりだったのに、初めて男の先生、それも軍隊で鍛えられた逞しい、筋骨隆々の身体の西田慶二先生が受け

持ちとなったときは、怖かったらどうしようと心配になりました。でも、温和な顔をされ、大らかな先生だったのではとしました。

でも、やっぱり、一番印象に残っているのは、忘れ物をしたとき、悪さが過ぎたときそして、嘘をついたときなど、竹の棒で頭をコツンとやられることでした。女の子の私たちより、男は強くあれと願っておられたからか、男の子にはいっそう厳しく、痛い目にあつた人もたくさんあつたようです。

私にとって、西田慶二先生に受け持ってもらった四・五・六年生の小学校生活は、のびのびとして暮らせた人生の中でも忘れることができない楽しい思い出に満ちています。

先生は山田から二十六インチの大きな自転車に乗って毎日学校に通ってこられました。今の先生ならさしずめマイカーというところでしょう。自転車を軽々と乗りこなし、若くて体力があり、元氣そのものだった先生の姿が懐かしく思い出されます。山田の先生の実家に遊びに行ったことがあります。千里山では考えられないくらい大きな家でした。山田の旧家だったのでしょうか。お父さんは千里第二小学校の校長先生を

勤められたと聞いたことがあります。お母さんは優しいそうなので、先生のあの大らかさはそこで培われたものでしょう。きっと、大きなお弁当を持ってこられていたに違いありませんが、給食のおかずを山のように食べておられたのを憶えています。親になり男の子を育ててみて、若い男性はいつもお腹をすかせていることがわかりました。

受け持ってもらった三年間、束縛の嫌いな私にとって本当に楽しいものでした。先生は、私たちのクラスの先生としてだけではなく、学校の仕事、学年の用事が多かったように思えます。運動会などの行事になると、逞しい身体で、テントはり、くい打ちなどに走りまわっておられました。そのぶん、クラスだけで何かをすることが少なく、弟のように卒業してからもいつまでも仲がよく、いまだに、クラスが纏まっているのは羨ましいところもあります。

「西田先生の思い出」を書くことで、何十年ぶりかで小学校時代のことを思い出しました。いまごろ皆はどうしているのかなと懐かしい顔が浮んできました。私の小学校生活は西田慶二先生抜きでは考えられませんが、今でも、胸を張って、私の小学校生活は楽しかった

たと人に言えるのは「西田慶二」先生のお陰と感謝しています。ありがとうございます。

西田先生の思い出(五)

教え子一同

* 西田先生を思い浮かべると真先に思い出されるお姿は、濃い縁の眼鏡と大きな体、そして音羽信子に負けず劣らずの「百万ドルのエクボ」です。先生のイメージは、桃太郎というよりは金太郎。明るく、大らかで力持ち。しかも部類の子供好き。分け隔てなく我々に接していただき、よき千里山時代の象徴のような先生でした。
(女性)

* 昭和二十年代後半と 생각합니다。一度、千二小に

お相撲さんが来られたことがあります。琴錦という幕内力士で、当時、お住まいは佐井寺だったと思います。淡路で病院を経営されていた藤川院長さんが、後援会会長をされていた関係で、千二小を訪れてくれたのだと思います。
その頃の千二小には運動会等を使う校庭の他に中段、上段にも校庭があり、その中段には隅に二宮尊徳の銅像の他、土俵がありました。そこで我々数十人が束になって琴錦に挑戦したのですが、西田先生は一对一で勝負されました。確か、三番勝負で、西田先生の一勝二敗でしたが、三番とも手に汗を握るほどの名勝負。琴錦は当然としても、西田先生も禪姿で、本物そっくり。先生の強さが印象に残る一戦でした。
(男性)

* 昭和二十年代中頃から給食が始まったと思うのですが、最初はアメリカからの払い下げ(?)の脱脂粉乳が主。これがどうしても飲めません。当時、私達はいつもお腹を空かしていたのですが、

しがみついたのを昨日のように覚えています。
(男性)

それでもウエー!と吐き気がして、ついつい残して脱脂粉乳の入った器には三分の一ほど残ってしまいます。すると先生が「好き嫌いはいけないよ。こんなに残して」といって、その器をひよいと持って職員室へ。全部平らげていただきました。本当に頼もしい先生でした。
(女性)

* 西田先生はとても記憶力抜群の先生で、全校生徒の名前をご存知でした。だから私のように全く担任でなかったものまで名前を覚えていただき、登校・下校時や校庭で遊んでいる時にも名前を声をかけていただき感激したのを覚えています。その分、いたずらなどしていて名指しでお叱りを受けた時は、親に伝わるのではないかと心配でしたが、その全ては杞憂でした。

その他、やはり登校・下校時に最初の頃は自転車、そのうちにスクーターをご使用でした。そんな時に「オー! *君おはよう」の声に「おはようございます。ア!先生乗せてください」とお願いすると「よし 乗れ」と先生の分厚い胸に

*

そういうえば千二小に限ったことではありませんが、親子二代が千二小の方がおられます。そのような方の一人で、私(萩原)の知る女性の子供の参観日に千二小へ。その時は西田先生が校長先生をされていたそうです。やはり記憶力抜群の西田校長先生が「*さん、貴女の当時の作文を見せてあげましょう。」と校長室へ。それには驚いたと伝えていただいたことがあります。
ちなみに西田先生のお父様は千二小・三代目の西田慶太郎校長先生で、西田慶二先生は第十代校長先生(昭和五十年四月〜昭和五十三年三月)を勤められました。
(編集部)

*

昭和二十二、三年の頃、当時は校庭を含め、ちよつとした空地は全て島に。食糧事情の極端に悪かった頃です。各人の自宅の庭も全て島や鶏、ア

ヒルを飼っていたお家もありました。日々は卵を
そして時には親鳥を食べたこともありました。そ
んな折にお父さんが未だ戦地から帰ってこられて
いない方や、戦争で亡くなった方のお宅を筆頭に
歟を持参され、お手伝いに訪れておられました。

(女性)

* 昭和二十四年四月から始まる新六年生のクラス
担任を決める職員会議で、あるクラスの担任だけ
はなかなか決まらなかったそうです。どうやら名
うでの腕白揃いのクラスで、たじろぐ先生が多か
ったとか。そのような中、「じゃ私が引き受けま
す」と言われたのが西田先生。そのクラスの一人
が現世話人代表の大森信さんだそうです。

(女性)

* 先生ご自身が身体がごつく、力も強く、お相撲も
強かったと思いますが、それだけに大相撲そのも
のお好きだったと思います。当時は栃錦や初代

若乃花の所謂 栃―若時代だったでしょうか？
それとも吉羽山・鏡里だったでしょうか？

未だ未だ余程の金持ちでないと自宅にテレビの
ない昭和二十年末

相撲の他にプロレス中継があり、力道山はもと
より、シャープ兄弟、鉄人・ルーテーズ、アメフ
ト出身でタツクルが得意だったレオノメリーニ、
ラテン系美男のエンリキトーレスの名も未だに覚
えています。我が家にテレビがない以上、関西大
学の食堂や金持ちの友達の家に見せてもらいに行
きました。下の噴水のある公園にテレビが置かれ
たのはもつと後でした。

そんな頃のある日、花壇町の友達の家で、西田
先生共々見せてもらいに行ったことがあります。
大きな庭で先生と相撲を取り、その後、大相撲観
戦。そしてすき焼きをご馳走になり。

確か先生は美味そうにビールを飲んでおられま
した。あんな苦いものを美味しそうにゴクゴクと
兎に角、豪快こそ当時の先生に相応しい言葉だと
思います。

(大人になって一緒に飲みたかった男)